

【エントリー情報】

自治体名：鳥取市

学校名：鳥取市立桜ヶ丘中学校

ご記入者：瀧 禎子

【設問】

1 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

今年度の本校の研究主題は、「深い学びにつながる言語活動～桜ヶ丘版アクティブ・ラーニングを通して～」と設定した。研究を進めていくにあたり、「①授業改革の徹底」「②伝える力の向上」「③主体的な生徒活動の推進」の3つを柱として進めてきた。

近年では、学びに対する興味・関心の希薄さや、受験終了と同時に消え失せる「知」の危険性が、日本の教育の危機とされてきた。本校でも、個人で習得した知識・技能を活用して仲間と共に発展させようとする姿や、「わかった、できた」という達成感に加えて更に新たな問いを立て、探究しようとする姿にまで至っていなかった。さらに、大学入試、高校入試では、アウトプットの場を評価するテストが始まり、学校現場において言語活動を充実させることが欠かせなくなっている。そこで、本校では「深い学びにつながる言語活動～桜ヶ丘版アクティブ・ラーニングを通して～」と設定し「思考したことを相手に伝えることを通して深い学びにつなげ、生徒の気づきや学びを見取っていきたい」と考えている。

本校の特色の1つとして、校区の小、中学校全体で取り組む短時間グループアプローチ「桜咲タイム」が挙げられる。これは自尊感情とソーシャルスキルを高めることを目的として、週1日10分間取り組む活動である。この活動を8年間継続して積み上げたことにより、生徒は意見を交流することに抵抗感を抱かなくなってきたことや、自分の思いや考えを話せるようになるなど、現在では本校の強みとなった。これを授業に生かし、対話を重視して学びを深める「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」という本校の学習スタイルが生まれた。この学習スタイルは生徒同士の対話や学び合いを意図的に取り入れる学習の型である。生徒の関心や意欲が高まり話し合い活動が活発になった一方、学力の定着や深まりについては効果が実感できないまま試行錯誤を繰り返してきた。その解決策の1つとしたのが、「生徒が思考した言葉（内なる言葉）をだれか（何か）に表現する（外言化する）」授業構成である。つまり「内言の外言化」である。本校で根付いてきた「生徒同士の対話」を基に、話し合っている内容を教師が見取り、話し合いの精度をどう高めていくかについて各教科で研究している。

また、鳥取県の音楽部会の研究主題「感じて伝え合い、つながる音楽活動」と設定していることから、本校の音楽科では、今年度、音楽から気づいたこと（知覚）と感じたこと

(感受)をつなげて言語で伝える力を育成することを目標としてきた。以上のことから、自身の授業では本校の研究主題である「深い学びにつながる言語活動」を基盤として、話し合いを基本としたグループ活動での学び合いの時間を設定することが重要であると考えた。さらに、知覚と感受をつなげる授業を基盤としながら、今年度は生徒の「自ら学びたい」という意欲を引き出すために、さらに研究をすすめていきたいと考えた。

2 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦勞を教えてください。（1,500 文字以内）

目標に対する具体的な取り組み

「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」の流れは、以下のような流れである。

- ①「内容目標」「態度目標」「授業の流れ」の提示
- ②個別の取り組み
- ③グループでの取り組み
- ④全体交流
- ⑤グループでの取り組みまたは個別の取り組み（④を深めるため）
- ⑥2度目の全体交流や評価問題
- ⑦振り返り

単にグループ協議（グループ活動）をするだけでは、話し合いに深まりを欠き、表面的な活動に終わってしまう。また、十分に吟味した発問であっても、深まるかどうかはグループの力量に左右されることが多く、学級全体として目標に到達できないこともあった。この解決策として、一度の話し合いで学びを深めようとせず、最初の協議を深めるために二度目の話し合いを設け、学級全体で一つの課題を追求していくことにした。しかし、教員間で二度の話し合いを持つための学習時間をどう調節するのか戸惑いの声があった。そこで、「どのようにすれば時間確保ができるのか」教員間で研究グループを組んで協議を重ね、実践していくことにした。

実践例として、

- ①個別の取り組みを十分に
- ②一度の話し合いは基本5分以内に
- ③ホワイトボード（またはICT 機器）には結論のみ
- ④発表順は教師が意図を持って指名

成果と課題としては、①の個人の取り組みを確保することは時間短縮へとつながった。早くグループ活動に入らせたいという焦りもあるが、個の考えがまとまっていないと結局のところ話し合いが円滑に進まず、深まらないからだ。また、個別活動のあとにグループでの話し合いがあることを伝えるようにしてからは、この段階でしっかりと取り組む必要があることを生徒たちは理解し、個別活動が充実した。さらに、その後の話し合いは意見を

集約することに集中できた。

②の基本5分以内の話し合いは、当初は足りない印象があったが、発問や協議題を工夫することで、短時間で濃密な意見交換を行うようになり、5分以上の設定をすとかえって時間を持て余すようになった。

③のホワイトボードには結論のみに関して、ホワイトボード（またはICT機器）が意見集約のツールであり、書いていることが発表準備完了の目安となっているが、更なるスリム化のためには道具に頼らない口頭での発表も検討したい。これは意識の高まりと発表技能の向上が前提条件である。

④の「発表順の指示」で、関連した意見を続けて発表させたり、内容の深まりに応じて順を組み替えたりすることで、よりよい理解につながった。また、二度のうち、必ず一度は発表できるようにすることで生徒の発表意欲も維持できた。

ICT機器による点に関しては、一人一台端末の活用に意欲的に取り組んだ。個人の意見を班へ素早く反映させたり、一気に全体共有したり、多くの意見を集約するなどの目的のためにタブレットを有効に活用することにした。成果としては、より多くの意見が短時間に集まり、通常の授業では紹介されにくい一人の考えも、全体に対して反映することが容易になった。特に、ミライシード「オクリンク」の活用は、個人の考えを提出ボックスに投稿後、それぞれが友達の考えを見たり、比較したりすることができ、互いに新たな知識を得たり学び合えたりする点がとても有効的であった。さらに教師のタイミングで意図的に友達の考えを共有できる点も自分の考えをしっかり持つという点で有効であった。ほかに、Jamboardを話し合いに活用した事例では、意見の視覚化がスムーズであったと同時に、個の意見を集約し、班全体の意見として集約される過程が可視化された。

今後は思考と表現の間の言語の往還をどのような根拠を持って見取り、評価していくかを掘り下げ、各教科の見方・考え方を基盤として、生徒が深く学ぶことの意義をさらに感じられるような授業づくりを目指していきたい。同時に、タブレットを活用した授業実践にも意欲的に取り組み、深い学びの扉を開ける生徒の育成にも力を注いでいきたい。

3 (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000 文字以内）

①教師の働き方の変化

まず、ICT活用の背景に関して、本校では、教科アンケート、生活習慣アンケート・・・など様々なアンケートを実施しているが、すべてタブレットで回答している。また、今年度より、「きもちメーター」を使用し、生徒は朝読書の前にタブレットで朝の健康観察を行っている。これらの取り組みにより、回答集約する業務の削減が感じられた。本校は約500名程度の生徒が在籍しており、アンケートの回答回収には常に労力をかけていた。回答回収が軽減されるだけでなく、クラウドを用いて教材などの情報共有が容易になった

り、それがデータ化され、今後の方針を立てる際の手がかりとし活用できることなど、私たち教師の働き方の変化にもつながっている。

各教科では、ミライシードの活用が盛んであった。特に1年生では、ドリルパークの実施だけではなく、オクリンクを使って授業に意欲的に取り組んでいた。実践例として、国語科では、「聞き上手になろう」という学習内容において、スピーチを聞き、話し手から思いを引き出すことを目標にインタビューをする活動の中に、音声データを録音し、そのデータをオクリンクに貼り付けて提出し、データを共有して意見交換する活動に取り組まれていた。保健体育の学習では、ダンスの授業でフォーメーションを考える活動でオクリンクを使い、カードにフォーメーションをタッチペンで書いたり、図形を使ったりして考え、提出したあと、グループで自分の考えを共有して自分のカードに友達の考えを追記するなど思考を深めるためにとても効果的であった。

教材研究の時間がなかなか確保できない日々の中、オクリンクのシンプルな操作によって、時間短縮につながっている。しかし、単元によっては、どの授業支援アプリが適しているのか悩むことが増えてきた。ICT活用の授業実践に少しずつ生徒、教師は日常化しつつあり、タブレット端末を駆使するようになってきている。教科会でICT活用についての協議を行ったり、実践例を伝えたりなど、日々授業力の向上につながっている。実際にオクリンクを使って、別のアプリの方が授業の流れが良かったのではと試行錯誤しながら研究に努めている先生の姿も見られた。このように、私たちは適切な授業支援アプリを取捨選択できるように日々励んでいる。

②ICT 活用による生徒、教師の態度

オクリンクの利用率が各教科で広まっていることが印象的だった。それは、なんといっても「使いやすさ」である。今年度より本校にミライシードが導入され、「オクリンク」が生徒も教師も互いに授業が楽しく取り組めるものであることを実感した。生徒たちは、学習課題を様々なツールを駆使して直感的に自分の思う通りに作成できることや、提出ボックスに入れたカードは一覧表示されるので、自分と友達の考えの比較を楽しむことができ、今まで以上に意欲的に授業に向かう生徒が存在した。また、マインドマップを作成したものを授業で生徒と共有して学習を進めたり、LIVEモニタリングで生徒の学習状況を見取ることもでき、授業の効率化が見られた。ミライシードを利用して1年がたとうとしているが、今後も各教科で実践例を共有していきたい。

オクリンク以外の学習支援アプリの活用でも、生徒の授業に対する意欲は高まっている。総合的な学習では、どの学年においてもグループ発表や生徒会などでGoogle スライドやApple のPages などでプレゼンテーションを作成する活動を積極的に行っている。「一人一台端末」という環境を最大限に活用し、生徒同士のコミュニケーションの円滑なツールになっている。これからは、生徒の方から教師に対してICT活用の方法を提案するなど、生徒が主体的に推進するような仕組みが生まれることを望んでいる。

③ICT 活用の変化による評価

評価の方法は、

- ・本校のGIGA スクール推進部会によるタブレットに関するアンケートが4月と12月に年に2回（生徒側）
- ・自治体による児童生徒情報活用能力に関する調査（生徒側）
- ・教師のICT 活用力チェック（教師側） など

アンケート形式によって毎年複数回調査している。

4 お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。

※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000 文字以内）

音楽科1年生鑑賞学習「魔王」

題材名「曲想と音楽の構造を理解して、その魅力を味わおう」

音楽科では、速度や強弱など「音楽を形づくっている要素」を提示し、これらをもとに生徒は音楽の要素から気づいたことを、どのように感じたり表現したりしたいのか考えさせる活動を取り入れている。まず、個人で考える時間をとり、班活動で、それぞれが意見を共有する。いきなり班で話し合いをするのではなく、まずは個人でじっくり音楽に向き合ってからではないと、自分の思考力が深まらない。だから班活動の前には必ず個人の活動を取り入れている。では、じっくり音楽と向き合うにはどうすればいいのか。

今年度、私が最も音楽の学習を通して言語活動に力を注いできたのが鑑賞学習である。今までの鑑賞学習では、全体で曲を鑑賞するスタイルであったが、一人ひとりが深く音楽に浸れるようにするにはどのようにすればいいのか研究した。そこで、鑑賞学習に最適であると考えたのが「オクリンク」である。魔王の授業の前に、映画音楽の鑑賞学習を実施したが、この学習では、班活動を実施せず、個人でじっくり音楽を味わう学習を行った。3つの映画音楽のうち、生徒はどれか1つを選択し、紹介文を書く活動をした。鑑賞方法だが、オクリンクに音源データを載せ、イヤホンで鑑賞させることにした。すると、じっくりと聴く様子があった。中には、繰り返し再生をしながら聴いたり、別の音楽と比較して聴いたりする様子があり、同時進行で紹介文を書くことができた。紹介文が書けたら提出ボックスに提出し、閲覧可能モードにしておけば、生徒たちは友達の紹介文を読むこともできた。さらに生徒たちの紹介文を印刷し、掲示をした。紹介文を書く際に、教師の紹介文のモデルを生徒に送り、モデルを例に書き方の指示ができた。視覚的支援も取り入れながら生徒は集中して取り組めた。

魔王の学習では、第1時で楽曲全体に関心をもつことができる授業を実施した。初めて楽曲を鑑賞したあと、気づいたこと感じたことを意見集約するために、Mentimeterというアプリを使用して、アンケートを実施した。生徒たちのオクリンクにリンクを貼っていたの

で、すぐ答えられた。全員の回答をモニターに提示し、友達がどんな言葉で伝えているのか興味をもち、共有しているときはとても盛り上がった。

第2時では、登場人物の声に注目し、それぞれの心情変化に注目する学習を実施した。ここでは、父、子、魔王の場面ごとの音源カード（CD音源をiPadの録音機能で録音したもの）をオクリンクに貼り付けているものを使う。最初に、個人でそれぞれの登場人物の声色の特徴を「音色」「強弱」「音の高さ」に注目しながらイヤホンで聞き、場面ごとに音源カードを並べ替える。そして、班で並べ替えた音源カードを見せ合いながら意見交換し、再びイヤホンスピーカーを使って、班で一台のタブレットで聴きながら意見を交わし、再度カードを並べ替えた。提出したあとは、班長が根拠をもとにプレゼンをする。その間にほかの生徒は、発表を聞きながらワークシートに書き留める。教師は、提出したカードをモニターに表示し、発表を聞きながらカードに書き留めていくので、視覚的支援として行うことができた。

まとめ学習では、魔王のポップを作って紹介する活動を実施した。ポップは、Canvaというデザイン制作アプリを使った。教師、生徒は、自分のGoogleアカウントで無料登録できる。このアプリはポスターやプレゼンテーションなど制作ができ、様々なデザインが豊富であり、とても使いやすい。あらかじめモデルとして作成していた教師のポップを紹介しながらポップに載せる内容を指示し、評価基準も伝えた。

できたポップは、PDFデータで保存し、オクリンクにデータを貼り付けて提出ボックスに提出する。提出したあとは、それぞれのポップ作品を見ることができ、互いに賞賛しあっている様子も微笑ましかった。ポップを印刷し、廊下に掲示をした。

オクリンクを使っての実践を通して、生徒も教師も使いやすさの点では互いに共感していた。個人、グループで思考を深める最適のツールであることには間違いなかった。また、提出ボックスに提出することが課せられていると、ペーパーでの課題提出よりも一生懸命になって課題に取り組む姿が見られた。中には、文字の読み書きが苦手な生徒も意欲的に紹介文を書いたりポップを作成したりすることができた。鑑賞学習で楽曲を分析する際には、各自でイヤホンを使ってじっくり何度も聴けることや、イヤホンスピーカーを使って班員と鑑賞しながら話し合うことができたことは、今までの鑑賞学習のスタイルと比べて大きく変化を感じた。大きなスピーカー1台を使って全体で聴きながら意見を共有するだけではなく、一人ひとりがしっかりと楽曲に向かう姿や、楽曲分析をして考えたことや感じたことを自分の思うように書き込み、簡単に提出、共有、比較ができる姿から、生徒の表現力の育成にもつながることができた。今後も音楽科の授業だけではなく、オクリンクを使ってどんな場面に効果があるのか、試行錯誤を積み重ねながら実践の幅を広げていきたい。

★参考資料



オクリンクの音源カードを鑑賞しながら班員と話し合い



Canvaで作成したポップをオクリンクから印刷して掲示

The screenshot shows a presentation software interface with four slides. The top navigation bar includes 'LIVE モニタリング', 'MYボード', '提出BOX', and a '比較を終了' button. The slides are titled '魔王' and '子'.

- Slide 1 (魔王):** Contains three audio source cards with lyrics. Handwritten notes in black ink include '声色とビバの音色がたかい → やさしい ぶたか' and '色い → さあていく'.
- Slide 2 (魔王):** Contains the same three audio source cards. Handwritten notes in red ink include '声色がさあてい! ビバの音色!' and 'やさしい → さあてい!'.
- Slide 3 (子):** Contains four audio source cards with lyrics. Handwritten notes in red ink include '自分の状況から変い → 怖い' and '速度が速い'.
- Slide 4 (子):** Contains the same four audio source cards. Handwritten notes in red ink include 'やさしい → さあてい' and 'やさしい → さあてい'.

音源カードを並べ変えたものを提出し、班長がプレゼンをした